

源氏物語

松風卷

与謝野晶子訳



源氏物語

松風

紫式部

與謝野晶子訳

あぢきなき松の風かな泣けばなき小琴
をとればおなじ音を弾くひ
(晶子)

東の院が美々しく落成したので、花散里はなちるさとといわれていた夫人を源氏は移らせた。西の対から渡殿わたどのへかけてをその居所に取って、事務の扱い所、家司けいしの詰め所なども備わった、源氏の夫人の一人としての体面

を損じないような住居すまいにしてあつた。東の対には明石あかしの人を置こうと源氏はかねてから思っていた。北の対をばことに広く立てて、かりにも源氏が愛人と見て、将来のことまでも約束してある人たちのすべてをそこへ集めて住ませようという考えをもっていた源氏は、そこを幾つにも仕切つて作らせた点で北の対は最もおもしろい建物になつた。中央の寢殿しんでんはだれの住居すまいにも使わずに、時々源氏が来て休息をしたり、客を招いたりする座敷にしておいた。

明石へは始終手紙が送られた。このごろは上京を促すことばかりを言う源氏であつた。女はまだ躊躇ちゆうちよをしているのである。わが身の上きじよのかいなさをよく知っていて、自分などとは比べられぬ都の貴女たちでさえ捨てられるのでもなく、また冷淡でなくもないような扱いを受け

て、源氏のために物思いを多く作るといふ噂うわさを聞くのであるから、
れだけ愛されているという自信があつてその中へ出て行かれよう、姫
君の生母の貧弱さを人目にさらすだけで、たまさかの訪問を待つにす
ぎない京の暮らしを考えるほど不安なことではないと煩悶はんもんをしながらも
明石は、そうかといつて姫君をこの田舎いなかに置いて、世間から源氏の子
として取り扱われないような不幸な目にあわせることも非常に哀れな
ことであると思つて、出京は断然しないと源氏へ答えることはでき
なかつた。両親も娘の煩悶するのがもつともに思われて歎息たんそくばかりし
ていた。入道夫人の祖父の中務卿親王が昔持つておいでになつた別荘
が嵯峨さがの大井川のそばにあつて、宮家の相続者にしかとした人がない
ままに別荘などもそのままに荒廢させてあるのを思い出して、親王の

時からずっと預かり人のようになっていた男を明石へ呼んで相談をした。

「私はもう京の生活を二度とすまいという決心で田舎へ引きこもったのだが、子供になってみるとそうはいかないもので、その人たちのためにまた一軒京に家を持つ必要ができたのだが、こうした静かな所にいて、にわかには京の町中の家へはいつても落ち着くものでないと思われるので、古い別荘のほうへでもやろうかと思う。そちらで今まで使っているだけの建物は君のほうへあげてもいいから、そのほかの所を修繕して、とにかく人が住めるだけの別荘にこしらえ上げてもらいたいと思うのだが」

と入道が言った。

「もう長い間持ち主がおいでにならない別荘になって、ひどく荒れた
ものですから、私たちは下屋しもやのほうに住んでおりますが、しかし今年
の春ごろから内大臣さんが近くへ御堂みどうの普請をお始めになりました、
あすこはもう人がたくさん来る所になっておりますよ、たいした御堂
ができるのですから、工事に使われている人数だけでもどんなに大き
いかしれません。静かなお住居すまいがよろしいのならあすこはだめかもし
れません」

「いや、それは構わないのだ。というのは内大臣家にも関係のあるこ
とでそこへ行こうとしているのだからね。家の中の設備などは追い追
いこちらからさせるが、まず急いで大体の修繕のほうをさせてくれ」

と入道が言う。

「私の所有ではありませんが、持っていらっしゃる方もなかったものですから、一軒家のような所を長く私が守って来たのです。別荘にいた田地なども荒れる一方でしたから、お亡くなりになりました民部大輔さん^{だゆう}にお願いして、譲っていただくことにしましてそれだけの金は納めたのでした」

預かり人は自身の物のようにしている田地などを回収されないかと危うがって、権利を主張しておかねばというように、鬚^{ひげ}むしやな醜い顔の鼻だけを赤くしながら顎^{あご}を上げて弁じ立てる。

「私のほうでは田地などいらない。これまでどおりに君は思っておればいい。別荘その他の証券は私のほうにあるが、もう世捨て人になってしまつてからは、財産の権利も義務も忘れてしまつて、留守^{るすい}居料も

払ってあげなかったが、そのうち精算してあげるよ」

こんな話も相手は、入道が源氏に関係のあることをにおわしたことで気味悪く思つて、私慾しよくをそれ以上たくましくはしかねていた。それから、入道家から金を多く受け取つて大井の山荘は修繕されていった。そんなことは源氏の想像しないことであつたから、上京をしたがらない理由は何にあるかと怪しんでは、姫君がそのまま田舎に育てられていくことによつて、のちの歴史にも不名誉な話が残るであらうと源氏は歎息たんそくされるのであつたが、大井の山荘ができ上がつてから、はじめて昔の母の祖父の山荘のあつたことを思い出して、そこを家にして上京するつもりであると明石から知らせて来た。東の院へ迎えて住ませようとしたことに同意しなかつたのは、そんな考えであつ

たのかと源氏は合点した。聡明^{そうめい}なしかただとも思ったのであった。惟^{これ}光^{みつ}が源氏の隠し事に関係しないことはなくて、明石の上京の件についても源氏はこの人にまず打ち明けて、さつそく大井へ山荘を見にやり、源氏のほうで用意しておくことは皆させた。

「ながめのよい所でございまして、やはりまた海岸のような気のされる所もございます」

と惟光は報告した。そうした山荘の風雅な女主人になる資格のある人であると源氏は思っていた。

源氏の作っている御堂は大覚寺の南にあたる所で、滝^{たき}殿^{どの}などの美術的なことは大覚寺にも劣らない。明石の山荘は川に面した所で、大木の松の多い中へ素朴^{そぼく}に寝殿の建てられてあるのも、山荘らしい寂しい

趣が出ているように見えた。源氏は内部の設備までも自身のほうでさせておこうとしていた。親しい人たちをもまたひそかに明石へ迎えに立たせた。

免れがたい因縁に引かれていよいよそこを去る時になったのである。と思うと、女の心は馴染深い明石の浦に名残が惜しまれた。父の入道を一人ぼっちで残すことも苦痛であつた。なぜ自分だけはこんな悲しみをしなければならぬのであらうと、朗らかな運命を持つ人がうらやましかつた。両親も源氏に迎えられて娘が出京するというようなことは長い間寝てもさめても願っていたことで、それが実現される喜びはあつても、その日を限りに娘たちと別れて孤独になる将来を考えるに堪えがたく悲しくて、夜も昼も物思いに入道は呆^{ぼう}としていた。言う

ことはいつも同じことで、

「そして私は姫君の顔を見ないでいるのだね」

そればかりである。夫人の心も非常に悲しかった。これまでもすでに同じ家には住まず別居の形になっていたのであるから、明石が上京したあとに自分だけが残る必要も認めてはいないものの、地方にいた間だけの仮の夫婦の中でも月日が重なって馴染なじみの深くなった人たちは別れがたいものに違いないのであるから、まして夫人にとっては頑固がんこな我意の強い良人おっとではあったが、明石に作った家で終わる命を予想して、信賴して来た妻なのであるからにわかに別れて京へ行ってしまうことは心細かった。光明を見失った人になって田舎いなかの生活をしていた若い女房などは、蘇生そせいのできたほどにうれしいのであるが、美しい明

石の浦の風景に接する日のまたないであろうことを思うことで心のめ
いることもあった。これは秋のことであつたからことに物事が身に沁
んで思われた。出立の日の夜明けに、涼しい秋風が吹いていて、虫の
声もする時、明石の君は海のほうをながめていた。入道は後夜ごやに起き
たままでいて、鼻をすすりながら仏前の勤めをしていた。門出の日は
縁起を祝つて、不吉なことはだれもいっさい避けようとしているが、
父も娘も忍ぶことができずに泣いていた。小さい姫君は非常に美しく
て、夜光の珠たまと思われる麗質の備わっているのを、これまでどれほど
入道が愛したかしのれない。祖父の愛によく馴染んでいる姫君を入道は
見て、

「僧形そうぎようの私が姫君のそばにいることは遠慮すべきだとこれまでも思い

ながら、片時だってお顔を見ねばいられなかった私は、これから先どうするつもりだろう」

と泣く。

「行くさきをはるかに祈る別れ路にたへぬは老いの涙なりけり

不謹慎だ私は」

と言つて、落ちてくる涙を拭い隠そうとした。尼君が、京時代の左

近中將の良人に、

「もろともに都は出できこのたびや一人野中の道に惑はん」

と言つて泣くのも同情されることであつた。信頼をし合つて過ぎた年月を思うと、どうなるかわからぬ娘の愛人の心を頼みにして、見捨てた京へ帰ることが尼君をはかなくさせるのであつた。明石が、

「いきてまた逢ひ見んことをいつとてか限りも知らぬ世をば頼まん

送つてだけでもくださいませんか」

と父に頼んだが、それは事情が許さないことであると入道は言いながらも途中が気づかわれるふうが見えた。

「私は出世することなどを思い切ろうとしていたのだが、いよいよその氣になつて地方官になつたのは、ただあなたに物質的にだけでも十

分尽くしてやりたいということからだった。それから地方官の仕事も私に適したものでないことをいろんな形で教えられたから、これをやめて地方官の落伍者らくごの一人で、京で輕蔑けいべつされる人間にこの上なつては親の名誉を恥ずかしめることだと悲しくて出家したがね、京を出たのが世の中を捨てる門出だったと、世間からも私は思われていて、よく潔くそれを実行したと私自身にも満足感はあるが、あなたが一人前の少女になつてきたのを見ると、どうしてこんな珠玉を泥土でいどに置くような残酷なことを自分はしたかと私の心はまた暗くなつてきた。それから私は仏と神を頼んで、この人までが私の不運に引かれて一地方人となつてしまうようなことがないようにと願つた。思いがけず源氏の君を婿に見る日が来たのであるが、われわれには身分のひけ目があつ

て、よいことにも悲しみが常に添っていた。しかし姫君がお生まれになつたことで私もだいぶ自信ができてきた。姫君はこんな土地で育ちになつてはならない高い宿命を持つ方に違いないのだから、お別れすることがどんなに悲しくても私はあきらめる。何事ももうとくにあきらめた私は僧じゃないか。姫君は高い高い宿命の人でいられるが、暫時の間私に祖父と孫の愛を作つて見せてくださつたのだ。天に生まれる人も一度は三途の川まで行くということにあたることだとそれをおもつて私はこれで長いお別れをする。私が死んだと聞いても仏事などはしてくる必要はない。死に別れた悲しみもしないでおおきなさい」

と入道は断言したのであるが、また、

「私は煙になる前の夕べまで姫君のことを六時の勤行こんぎょうに混ぜて祈るとだろう。恩愛が捨てられないで」

と悲しそうに言うのであった。車の数の多くなることも人目を引くことであるし、二度に分けて立たせることも面倒めんどうなことであるといつて、迎えに来た人たちもまた非常に目だつことを恐れるふうであつたから、船を用いてそつと明石親子は立つことになった。

午前八時に船が出た。昔の人も身にしむものに見た明石の浦の朝霧に船の隔たつて行くのを見る入道の心は、仏弟子ぶつでしの超越した境地に引きもどされそうもなかった。ただ呆然ぼうぜんとしていた。

長い年月を経て都へ帰ろうとする尼君の心もまた悲しかった。

かの岸に心寄りにし海人船あまぶねのそむきし方に漕こぎ帰るかな

と言つて尼君は泣いていた。明石は、

いくかへり行きかふ秋を過ごしつつ浮き木に乗りてわれ帰るらん

と言つていた。追い風であつて、予定どおりに一行の人は京へはいることができた。車に移ってから人目を引かぬ用心をしながら大井の山莊へ行つたのである。

山莊は風流にできていて、大井川が明石でながめた海のように前を流れていたから、住居すまいの変わった気もそれほどしなかった。明石の生

活がなお近い続きのように思われて、悲しくなることが多かった。増築した廊なども趣があつて園内に引いた水の流れも美しかった。欠点もあるが住みついたならきつとよくなるであらうと明石の人々は思つた。源氏は親しい家司けいしに命じて到着の日の一行の饗応きようおうをさせたのであつた。自身で訪ねて行くことは、機会を作ろう作ろうとしながらもおくれるばかりであつた。源氏に近い京へ来ながら物思ひばかりがされて、女は明石あかしの家も恋しかったし、つれづれでもあつて、源氏の形見の琴きんの絃いとを鳴らしてみた。非常に悲しい氣のする日であつたから、人の来ぬ座敷で明石がそれを少し弾ひいていると、松風の音が荒々しく合奏をしかけてきた。横になつていた尼君が起き上がつて言つた。

身を変へて一人帰れる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く

女^{むすめ}が言^いつた。

ふるさどに見し世の友を恋ひわびてさへづることを誰^{たれ}か分くらん

こんなふうにはかながって暮らしていた数日ののちに、以前にもまして逢^あいがたい苦しさを切に感じる源氏は、人目もはばからずに大井へ出かけることにした。夫人にはまだ明石の上京したことは言つてなかつたから、ほかから耳にはいつては気まずいことになると思つて、源氏は女房を使いにして言わせた。

かつら

さしず

「桂に私が行って指図さしずをしてやらねばならないことがあるのですが、それをそのままにして長くなっています。それに京へ来たら訪ねようという約束のしてある人もその近くへ上つて来ているのですから、済まない気がしますから、そこへも行つてやります。嵯峨野さかののの御堂みどうに何もそろっていない所にいらっしゃる仏様へも御挨拶あいさつに寄りますから二、三日は帰らないでしょう」

夫人は桂の院という別荘の新築されつつあることを聞いたが、そこへ明石の人を迎えたのであつたかと気づくとうれしいこととは思えなかつた。

おの

せんじん

「斧おのの柄を新しくなさなければ（仙人せんじんの碁を見物している間に、時がたつて気がついてみるとその樵夫きこりの持っていた斧の柄は朽ちていた

という話）ならないほどの時間はさぞ待ち遠いことでしょう」

不愉快そうなこんな夫人の返事が源氏に伝えられた。

「また意外なことをお言いになる。私はもうすっかり昔の私でなくなつたと世間でも言うではありませんか」

などと言わせて夫人の機嫌きげんを直させようとするうちに昼になつた。

微行しのびで、しかも前駆には親しい者だけを選んで源氏は大井へ来た。

夕方前である。いつも狩衣姿かりぎぬをしていた明石時代でさえも美しい源氏

であつたのが、恋人に逢うがために引き繕うれつた直衣姿のうしはまばゆいほど

またりっぱであつた。女のした長い愁うれいもこれに慰められた。源氏は

今さらのようにこの人に深い愛を覚えながら、二人の中に生まれた子供を見てまた感動した。今まで見ずにいたことさえも取り返されない

損失のように思われる。左大臣家で生まれた子の美貌を世人はたたえ
るが、それは権勢に目がくらんだ批評である。これこそ真の美人にな
る要素の備わった子供であると源氏は思った。無邪気な笑顔の愛嬌の
多いのを源氏は非常にかわいく思った。乳母めのとも明石へ立って行ったこ
ろの衰えた顔はなくなつて美しい女になっている。今日までのことを
いろいろとなつかしいふうに話すのを聞いていた源氏は、塩焼き小屋
に近い田舎いなかの生活をしいてさせられてきたのに同情するといふような
ことを言つた。

「ここだつてまだずいぶんと遠すぎる。したがって私が始終は来られ
ないことになるから、やはり私があなたのために用意した所へお移り
なさい」

と源氏は明石に言うのであったが、

「こんなふうには田舎者であることが少し直りましてから」

と女の言うのも道理であつた。源氏はいろいろに明石の心をいたわつたり、将来を堅く誓つたりしてその夜は明けた。なお修繕を加える必要のある所を、源氏はもとの預かり人や新たに任命した家職の者に命じていた。源氏が桂の院へ来るといふ報せしらがあつたために、この近くの領地の人たちの集まつて来たのは皆そこから明石の家のほうへ来た。そうした人たちに庭の植え込みの草木を直させたりなどした。「流れの中にあつた立石たていしが皆倒れて、ほかの石といっしよに紛れてしまつたらしいが、そんな物を復旧させたり、よく直させたりすればいいぶんおもしろくなる庭だと思われるが、しかしそれは骨を折るだけ

かえつてあとでいけないことになる。そこに永久いるものでもないから、いつか立つて行ってしまう時に心が残つて、どんなに私は苦しかつたらう、帰る時に」

源氏はまた昔を言い出して、泣きもし、笑いもして語るのであつた。こうした打ち解けた様子の見える時に源氏はいつそう美しいのであつた。のぞいて見ていた尼君は老いも忘れ、物思いも跡かたなくなつてしまふ気がして微笑ほほえんでいた。東の渡殿わたどのの下をくぐつて来る流れの筋を仕変えたりする指図さしずに、源氏は袿うちぎさを引き掛けたくつろぎ姿でいるのがまた尼君にはうれしいのであつた。仏の關伽あかの具などが縁に置かれてあるのを見て、源氏はその中が尼君の部屋であることに気がついた。

「尼君はこちらにおいでになりますか。だらしのない姿をしています」

と言って、源氏は直衣のうしを取り寄せて着かえた。几帳きちょうの前にすわって、

「子供がよい子に育ちましたのは、あなたの祈りを仏様がいれてくださったせいだろうとありがとうございます。俗をお離れになった清い御生活から、私たちのためにまた世の中へ帰って来てくださったことを感謝しています。明石ではまた一人でお残りになって、どんなにこちらのことを想像して心配していただくだろうと済まなく私は思っています」

となつかしいふうに話した。

「一度捨てました世の中へ帰ってまいって苦しんでおります心も、お察しくださいましたので、命の長さもうれしく存ぜられます」

尼君は泣きながらまた、

「荒磯^{あらいそ}かげに心苦しく存じました二葉^{ふたば}の松もいよいよ頼もしい未来が思われます日に到達いたしました^{さわ}が、御生母がわれわれ風情^{ふぜい}の娘でございますことが、御幸福の障^{さわ}りにならぬかと苦勞にしております」

などという様子に品のよさの見える婦人であつたから、源氏はこの山莊^{あるじ}の昔の主の親王のことなどを話題にして語つた。直された流れの水はこの話に言葉を入れたいように、前よりも高い音を立てていた。

住み馴^なれし人はかへりてたどれども清水^{しみづ}ぞ宿^{あるじ}の主人がほなる

歌であるともなくこう言う様子に、源氏は風雅を解する老女である
と思つた。

「いさらゐははやくのことも忘れじをもとの主人あるじや面変おもはりせる

悲しいものですね」

と歎息たんそくして立つて行く源氏の美しいとりなしにも尼君は打たれて茫ぼう
となつていた。

源氏は御堂みどうへ行つて毎月十四、五日と三十日に行なう普賢講ふげんこう、阿弥あみ
陀だ、釈迦しゃかの念仏さんまいの三昧さんまいのほかにも日を決めてする法会ほうえのことを僧たち
に命じたりした。堂の裝飾や仏具の製作などのことも御堂の人々へ指さし

図^ずしてから、月明の路^{みち}を川沿いの山莊へ歸つて來た。

明石の別離の夜のことが源氏の胸によみがえつて感傷的な気分になつてゐる時に女はその夜の形見の琴を差し出した。弾^ひきたい欲求もあつて源氏は琴を弾き始めた。まだ絃^{いと}の音^ねが変わつていなかつた。その夜が今であるようにも思われる。

契りしに変はらぬ琴のしらべにて絶えぬ心のほどは知りきや

と言うと、女が、

変はらじと契りしことを頼みにて松の響に音^ねを添へしかな

と言う。こんなことが不つりあいに見えないのは女からいえば過分なことであつた。明石時代よりも女の美に光彩が加わっていた。源氏は永久に離れがたい人になつたと明石を思っている。姫君の顔からもまた目は離せなかつた。日蔭ひかげの子として成長していくのが、堪えられないほど源氏はかわいそうで、これを二条の院へ引き取つてできる限りにかきずいてやることにすれば、成長後の肩身の狭さも救われることになるであらうとは源氏の心に思われることであつたが、また引き放される明石の心が哀れに思われて口へそのことは出ずにただ涙ぐんで姫君の顔を見ていた。子心にはじめは少し恥ずかしがっていたが、今はもうよく馴なれてきて、ものを言つて、笑つたりもしてみせた。甘えて近づいて来る顔がまたいっそう美しくてかわいいのである。源氏

に抱かれている姫君はすでに類のない幸運に恵まれた人と見えた。

三日目は京へ帰ることになっていたので、源氏は朝もおそく起きて、ここから直接帰って行くつもりでいたが、桂の院のほうへ高官がたくさん集まって来ていて、この山荘へも殿上役人がおおぜいで迎えに来た。源氏は装束をして、

「きまりの悪いことになったものだね、あなたがたに見られてよい家^{うち}でもないのに」

と言いながらいつしよに出ようとしたが、心苦しく女を思つて、さりげなく紛らして立ち止まった戸口へ、乳母^{めのと}は姫君を抱いて出て来た。源氏はかわいい様子で子供の頭を撫^なでながら、

「見ないでいることは堪えられない気のするのにもにわかな愛情すぎる

ね。どうすればいいだろう、遠いじゃないか、ここは」

と源氏が言うと、

「遠い田舎の幾年よりも、こちらへ参つてたまさかしかお迎えできないようなことになりましたは、だれも皆苦しゅうございましょう」

など乳母は言つた。姫君が手を前へ伸ばして、立っている源氏のほうへ行こうとするのを見て、源氏は膝ひざをかがめてしまった。

「もの思いから解放される日のない私なのだね、しばらくでも別れているのは苦しい。奥さんはどこにいるの、なぜここへ来て別れを惜しんでくれないのだろう、せめて人心地ひとごころが出てくるかもしれないのに」

と言うと、乳母は笑いながら明石の所へ行つてそのとおりを言つた。女は逢あつた喜びが二日で尽きて、別れの時の来た悲しみに心を乱

していて、呼ばれてもすぐに出ようとしないうのを源氏は心のうちであまりにも貴女きじよぶるのではないかと思っていた。女房たちからも勧められて、明石あかしはやつと膝行いざつて出て、そして姿は見せないように几帳きちようの蔭かげへはいるようにしている様子に氣品が見えて、しかも柔らかい美しさのあるこの人は内親王と言つてもよいほどに氣高けだかく見えるのである。源氏は几帳たの垂れ絹を横へ引いてまたこまやかにささやいた。いよいよ出かける時に源氏が一度振り返つて見ると、冷静にしていた明石も、この時は顔を出して見送っていた。源氏の美は今が盛りであると思われた。以前は瘦やせて背丈せたいが高いように見えたが、今はちよいどいいほどになっていた。これでこそ貫目のある好男子になられたといふものであると女たちがながめていて、指貫さしぬきの裾すそから愛嬌あいきようはこぼれ

出るように思った。解官されて源氏について漂泊さすらえた蔵人くろうどもまた旧もとの地位に復かえつて、鞍負尉ゆぎえのじようになつた上に今年は五位も得ていたが、この好青年官人たちが源氏の太刀を取りに戸口へ来た時に、御簾みすの中に明石のいるのを察あひさつして挨拶をした。

「以前の御厚情を忘れておりませんが、失礼かと存じますし、浦風に似た気のいたしました今暁の山風にも、御挨拶を取り次いでいただく便びんもございませんでしたから」

「山に取り巻かれておりましては、海べの頼りない住居すまいと変わりもなくて、松も昔の（友ならなくに）と思つて寂しがつておりましたが、昔の方がお供の中においでになつて力強く思います」

などと明石は言つた。すばらしいものにこの人はなつたものだ、自

分だつて恋人にしたいと思つたこともある女ではないかなどと思つて、驚異を覚えながらも蔵人くらうどは、

「また別の機会に」

と言つて男らしく肩を振つて行つた。りっぱな風采ふうさいの源氏が静かに歩を運ぶかたわらで先払いの聲が高く立てられた。源氏は車へ頭中とうのちゆう将、兵衛督などを陪乗させた。

「つまらない隠れ家を発見されたことはどうも残念だ」

源氏は車中でしきりにこう言つていた。

「昨夜はよい月でございましたから、嵯峨さがのお供のできませんでしたことが口惜くちおしくてなりません、今朝けさは霧の濃い中をやつて参つたのでございます。嵐山あらしやまの紅葉もみじはまだ早うございました。今は秋草の盛り

でございますね。某朝臣ぼうあそんはあすこで小鷹狩こたかがりを始めてただ今いっしよに参れませんでした。が、どういたしますか」

などと若い人は言った。

「今日はもう一日桂かつらの院で遊ぶことにしよう」

と源氏は言つて、車をそのほうへやった。桂の別荘のほうではとにかく客の饗応きやうおうの仕度したくが始められて、鵜飼ういなども呼ばれたのであるがその人夫たちの高いわからぬ会話が聞こえてくることに海岸にいたころの漁夫の声が思い出される源氏であつた。大井の野に残つた殿上役人が、しるしだけの小鳥を萩はぎの枝などへつけてあとを追つて来た。杯がたびたび巡つたあとで川べの逍遙しやうようを危あやぶまれながら源氏は桂の院で遊び暮らした。月がはなやかに上つてきたころから音楽の合奏が始

まった。絃樂のほうは琵琶^{びわ}、和琴^{わごん}などだけで笛の上手^{じょうず}が皆選ばれて伴奏をした曲は秋にしっくり合ったもので、感じのよいこの小合奏に川風が吹き混じっておもしろかった。月が高く上ったころ、清澄な世界がここに現出したような今夜の桂の院へ、殿上人がまた四、五人連れで来た。殿上に伺候していたのであるが、音楽の遊びがあつて、帝^{みかど}が、

「今日は六日の謹慎日が済んだ日であるから、きっと源氏^{おとど}の大臣は来るはずであるのだ、どうしたか」

と仰せられた時に、嵯峨へ行っていることが奏されて、それで下された一人のお使いと同行者なのである。

「月のすむ川の遠なる里なれば桂の影はのどけかるらんをち

うらやましいことだ」

これが蔵人くらうどのべん弁であるお使いが源氏に伝えたお言葉である。源氏はか
しこまって承った。清涼殿での音楽よりも、場所のおもしろさの多く
加わったこの管絃楽に新来の人々は興味を覚えた。また杯が多く
巡った。ここには纏頭てんとうにする物が備えてなかったために、源氏は大井
の山荘のほうへ、

「たいそうでない纏頭の品があれば」

と言ってやった。明石あかしは手もとにあった品を取りそろえて持たせて
来た。衣服箱二荷であった。お使いの弁は早く帰るので、さっそく女

装束が纏頭に出された。

久方の光に近き名のみして朝夕霧も晴れぬ山ざと

というのが源氏の勅答の歌であつた。帝の行幸を待ち奉る意がある
のであろう。「中に生おひたる」（久方の中におひたる里なれば光をの
みぞ頼むべらなる）と源氏は古歌を口ずさんだ。源氏がまた躬みづね恒が
「淡路にてあはとはるかに見し月の近き今宵こよひはところがらかも」と不
思議がつた歌のことを言い出すと、源氏の以前のことを思つて泣く人
も出てきた。皆酔つてもいるからである。

めぐりきて手にとるばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月

これは源氏の作である。

浮き雲にしばしまがひし月影のすみはつるよぞのどけかるべき

とうのちゅうじょう

頭中将である。右大弁は老人であつて、故院の御代にも睦まじくお召し使いになった人であるが、その人の作、

雲の上の住みかを捨てて夜半の月いづれの谷に影隠しけん

なおいろいろな人の作もあつたが省略する。歌が出てからは、人々は感情のあふれてくるままに、こうした人間の愛し合う世界を千年も続けて見ていきたい気を起こしたが、一条の院を出て四日目の朝になつた源氏は、今日はぜひ帰らねばならぬと急いだ。一行にいろいろな物をかついだ供の人が加わつた列は、霧の間を行くのが秋草の園のようで美しかった。近衛府このえふの有名な芸人とねりの舎人で、よく何かの時には源氏について来る男に今朝も「その駒こま」などを歌わせたが、源氏をはじめ高官などの脱いで与える衣服の数が多くてそこにもまた秋の野の錦にしきの翻る趣があつた。大騒ぎにはしゃぎにはしゃいで桂の院を人々の引き上げて行く物音を大井の山荘でははるかに聞いて寂しく思った。言ことづてもせずに帰って行くことを源氏は心苦しく思った。

二条の院に着いた源氏はしばらく休息をしながら夫人に嵯峨さがの話をした。

「あなたと約束した日が過ぎたから私は苦しみましたよ。風流男どもがあとを追って来てね、あまり留めるものだからそれに引かれていたのですよ。疲れてしまった」

と言って源氏は寢室へはいった。夫人が気むずかしいふうになつてゐるのも気づかないように源氏は扱っていた。

「比較にならない人を競争者でもあるように考えたりなどすることもあることですよ。あなたは自分では自分であると思ひ上がつていれればいいのですよ」

と源氏は教えていた。日暮れ前に参内しようとして出かけぎわに、

源氏は隠すように紙を持って手紙を書いているのは大井へやるものらしかった。こまごまと書かれている様子がうかがわれるのであった。

侍を呼んで小声でささやきながら手紙を渡す源氏を女房たちは憎く思った。その晩は御所で宿直とのいもするはずであるが、夫人の機嫌きげんの直つていなかったことを思つて、夜はふけていたが源氏は夫人をなだめるともりで帰つて来ると、大井の返事を使いが持つて来た。隠すこともできずに源氏は夫人のそばでそれを読んだ。夫人を不愉快にするようなことも書いてなかったので、

「これを破つてあなたの手で捨ててください。困るからね、こんな物が散らばっていたりすることはもう私に似合つたことではないのだからね」

と夫人のほうへそれを出した源氏は、脇息きょうそくによりかかりながら、心のうちでは大井の姫君が恋しくて、灯ひをながめて、ものも言わずにじつとしていた。手紙はひろがったままであるが、女王にょおうが見ようともしないのを見て、

「見ないようにしていて、目のどこかであなたは見ているじゃありませんか」

と笑いながら夫人に言いかけた源氏の顔にはこぼれるような愛嬌あいきょうがあつた。夫人のそばへ寄つて、

「ほんとうはね、かわいい子を見て来たのですよ。そんな人を見るとやはり前生の縁の浅くないということが思われたのですがね、とにかく子供のことはどうすればいいのだろう。公然私の子供として扱うこ

とも世間へ恥ずかしいことだし、私はそれで煩悶はんもんしています。いっしょにあなたも心配してください。どうしよう、あなたが育ててみませんか、三つになっているのです。無邪気なかわいい顔をしているものだから、どうも捨てておけない気がします。小さいうちにあなたの子にしてもらえば、子供の将来を明るくしてやれるように思うのだが、失敬だと思いにしなければあなたの手で袴着はかまぎをさせてやってください」

と源氏は言うのであった。

「私を意地悪な者のようにばかり決めておいでになって、これまでから私には大事なことを皆隠していらっしゃるものですもの、私だけがあなたを信賴していることも改めなければならぬ」とこのごろは私

思っています。けれども私は小さい姫君のお相手にはなれますよ。どんなにおかわいいでしよう、その方ね」

と言つて、女王は少し微笑ほほえんだ。夫人は非常に子供好きであつたから、その子を自分がもらつて、その子を自分が抱いて、大事に育ててみたいと思つた。どうしよう、そうは言つたもののここへつれて来たものであろうかと源氏はまた煩悶はんもんした。

源氏が大井の山莊を訪うことは困難であつた。嵯峨さがの御堂みどうの念仏の日を待つてはじめて出かけられるのであつたから、月に二度より逢あいに行く日はないわけである。七夕たなばたよりは短い期間であつても女にとつては苦しい十五日が繰り返されていつた。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
